①『海洋プラスチック 永遠のごみの行方』
②海のプラスチックごみを減らすために僕は何ができるのか
③中学一年　④石井 啓介

僕は今年の夏、大阪の海遊館に行った。大きな水槽の中をジンベイザメがゆったりと泳ぐ姿を見て自然の素晴らしさを感じた後、ある展示が目に入った。海遊館が保護したウミガメの排泄物から、大量のプラスチックごみが発見された記録だ。プラスチック製のごみ袋を餌のクラゲと間違えて飲み込んでいたため一ヶ月何も食べなかったこと、その全ての排泄に六ヶ月かかったこと。そして実際に展示されていたバット一杯分にもなる排泄物のプラスチックごみ。直前に見た綺麗な水槽の様子と比べると、急に地球環境の現実を突きつけられたようでとてもショックだった。

僕は、海のプラスチックごみについて知る必要があると思い、この本を読むことにした。

僕がまず最初に驚いたことは、世界の海岸に落ちているごみは、二〇一七年以降、上位十位が全てプラスチック製品だということだ。掃除をしなければプラスチックごみのない浜に戻ることはほぼあり得ないそうで、海辺に

20×20

住む生き物たちのことを考えると心臓がきゅっとなった。プラスチックは、自然のものではなく人間が便利には生きるために作り出したものだ。その処理は、陸に住む人間が責任をもって陸で終わらせるべきだと思う。僕たちの快適な生活と引き換えに、海の生き物が苦しむことは絶対に許されないことだと思った。

そして、この本を読んで一番驚いたことは、海のマイクロプラスチックごみの問題である。マイクロプラスチックとは、五ミリメートル以下のプラスチック片のこと。プラスチックは紫外線に当たるともろくなって割れる性質があり、波に打たれると粉々になる。このマイクロプラスチックを海の生き物たちが食べてしまうことが、大きな問題となっているそうだ。僕は、海のごみ問題は、人間が拾えるような大きさのごみについてイメージしていたので、綺麗だと思っていた海の中に、実は目には見えにくいマイクロプラスチックごみが混じっているということを知り衝撃を受けた。以前

海に行った時、海の水を手ですくったことがあるが、その中にもマイクロプラスチックがあったかもしれないと思うと心が痛む。しかもマイクロプラスチックはとても小さいため、広い海から回収するのはほぼ不可能だろう。二〇一四年に、世界の海には五十一兆個のマイクロプラスチックが漂っているという調査結果が出たそうだ。プラスチックは、どんなに小さくなっても自然界では分解されずに残り続けるので、人間がプラスチックを使い続ける限り、海のプラスチックごみは五十一兆個からどんどん増え続けてしまうことになる。

それでは、プラスチックを使わなければよいのだろうか。僕は、自分の生活の中にあるプラスチックを調べてみた。まず朝起きて歯磨きをする。歯ブラシはプラスチックだし、歯磨き粉の容器もプラスチックだ。朝ご飯のメニューは、ご飯、卵焼き、納豆、サラダ、ヨーグルトだった。米も卵も納豆もヨーグルトの袋や容器に入っている。

③ 石井啓介

野菜でさえプラスチック製品に保護されて売られていることが多いと思う。朝の時点で、僕はプラスチックなしでは生活ができなかった。便利だから世界中で様々なものに使われて人々の生活を支えているのだろう。今後も使わないように、することはできないと思う。僕にできることを考えたい。特に大切だと思うのは、家庭から出るプラスチックごみを減らすことだ。僕の家では、買い物にエコバッグを持参し、ごみはきちんと分別している。

僕は何がリサイクルに出せるのかを全て覚えているわけではないので、これから母に教えてもらいながら正しく分別できるようになりたい。また、プラスチック製品を買うときは、本当に必要なのかを考えてから買いたいと思う。そして、海のごみ拾いもしてみたいと思った。全て拾えるとは思えないが、少しでもマイクロプラスチックの元となるごみを取り除き、これ以上、海に流れ込むのを防ぎたい。一人で節約できるプラスチック資源や拾え

④ 石井 皓介

るごみはほんのわずかだ。人によっては、海にある大量のプラスチックごみと比べると無力だと感じてしまうかもしれない。だからこそ僕は、一人一人が小さな行動を積み重ねることが大切だと思う。同じように、考えて行動する人が増えれば、それは大きな力になる。本の中にも、継続は力なりでごみを掃除した結果、綺麗になった浜辺があると書いてあった。僕もあきらめずに、自分にできることが何かを考えて取り組んでいきたいと思う。

20×20